

# 天正十六年閏五月八日張行漢和聯句

—— 翻刻と解題 ——

赤嶺孝仁  
國部真貴子  
竹島一希

## 【解題】

永青文庫所蔵の天正十六（一五八八）年閏五月八日張行漢和聯句は、早く、長谷川強・野口元大「北岡文庫蔵書解説目録——細川幽斎関係文学書——」<sup>①</sup>に紹介されたが、東京永青文庫に移ったためか、その後『連歌総目録』<sup>②</sup>には収載されなかった。それ故、『連歌総目録』に基づいて資料を収集した『後齋和漢聯句作品集成』<sup>③</sup>には見落とされ、現在ではほとんど知られていない。しかし、本聯句は、西笑承兌、細川幽斎、紹巴、素然（中院通勝）など、当時を代表する文人、禪僧が一座しており、政治的・文化的状況を考える上で見逃すことのできない資料である。ここに全文を翻刻し、簡単な紹介を行いたい。

まず、前掲「北岡文庫蔵書解説目録」に記載された、本聯句の解説をそのまま引用する。

漢和聯句 一卷 二一・五（紙高一七・四）×四七〇・五

箱入。箱書「漢和連句西笑承兌」（泰勝院殿—幽斎）。端

作「天正十六年閏五月八日」漢和聯句。卷子本。発句

「新竹愛風靜西笑」脇「雨の名残の露の涼きよ」（寺法印）。西咲八、

有和九、玄旨法印十、心前八、兼続八、寿三六、有節八、

由己七、紹巴法橋十、友益一、素然八、昌叱九、清斎八

ついで、作者を詠作順に掲げる<sup>④</sup>。名の下の（ ）は、本聯句における詠作句数を示す。なお、本聯句の詠まれた天正十六

年前後の状況を詳しく記した。

西咲(八句) 西咲承兌(一五四八年～一六〇七年)。臨濟宗夢

窓派滋濟門派の僧。天正十二(一五八四)年、相国寺九十二世。同年鹿苑僧録となり<sup>5)</sup>、天正十九年まで勤める。天正十七年、南禅寺(不住)。慶長二年から十二年まで鹿苑僧録再任。豊臣秀吉や徳川家康のもと、外交文書の作成を任せられるなど、信頼が篤かった。

玄旨法印(十句) 細川幽齋(一五三四年～一六一〇年)。武士、歌人、古典学者。母は清原宣賢女。細川晴広の養子となる。

天正八(一五八〇)年丹後国入国、天正十年の本能寺の変に伴い、家督を嫡男忠興に譲り、田辺城(京都府舞鶴市)に隠居した。元龜三(一五七二)年から天正四年にかけて、三条西実枝から古今伝授を受けた。

兼統(八句) 直江兼統(一五六〇年～一六一九年)。上杉景勝に仕える重臣。天正十三(一五八五)年には、本聯句に一座する木戸元齋に『師説撰歌和歌集』を選ばせた。天正十六年八月十七日、「従五位下豊臣兼統」が山城守に任じられており、豊臣秀吉より豊臣姓を授けられたことが分かる<sup>6)</sup>。

有節(八句) 有節瑞保(一五四八年～一六三三年)。臨濟宗夢窓派寿寧門派の僧。天正十五年、相国寺九十三世。天正十九年から慶長二年まで、慶長十二年から十七年まで、鹿苑僧録。紹巴法橋(十句) 紹巴(一五二四年～一六〇二年)。連教師。

里村北家祖。周桂、昌休に師事する。文禄四(一五九五)年から慶長二(一五九七)年にかけて、秀吉の勤気に触れ、三井寺門前に蟄居した。

素然(八句) 中院通勝(一五五六年～一六一〇年)。内大臣正二位中院通為と三条西公条女のもとに生まれる。順調に官位を上げるも、天正八(一五八〇)年六月、正親町天皇の勅勘を蒙り、丹後国の細川幽齋のもとに身を寄せる。天正十四年に出家し、法名を素然と名乗る。極官は正三位権中納言。

昌叱(九句) 昌叱(一五三九年～一六〇三年)。連教師。里村南家祖。俗名は里村仍景。父昌休の弟子であった紹巴の後見を受けるも、後年反目することが多かった。

清叔(八句) 清叔寿泉(一五一六年～一五九五年)。臨濟宗夢窓派永泰門派の僧。天正十五年、南禅寺(不住)、天正十六年、相国寺。江戸初期の儒学者である藤原惺窩の叔父であり、惺窩の世話をするが、文禄三(一五九四)年に絶縁した。なお、先掲した「北岡文庫蔵書解説目録」では「清齋」と翻刻される<sup>7)</sup>。

有和(九句) 有和寿筠(生没年未詳)。臨濟宗夢窓派永泰門派の僧。京都の土倉であった吉田(角倉)氏の出身。天正十年、臨川寺、景德寺。天正十七年、建長寺。

心前(八句) 心前(生年未詳～一五八八年)。紹巴門の連教師。紹巴の『連歌新式』講釈を聞き、『連歌新式心前注』にまとめた。天正十六年十二月二十三日に心前追悼の百韻が張行さ

れている（連聚千句〈国文学研究資料館・ナ三一七六〉）ことから、本聯句に一座して半年ほどで死去している。

寿三（六句） 木戸元齋（生没年未詳）。武士、古典学者。祖父の木戸正吉は、東常和の門弟で木戸孝範女を母とし、東家流と木戸流の二流派の歌学を受け継いだという。直江兼統に仕え、兼統の命で『師説撰歌和歌集』を選ぶ。

由己（七句） 大村由己（一五三六年～一五九六年）。御伽衆、右筆。諸寺に学ぶも、天正年間初頭に還俗。豊臣秀吉に御伽衆として仕えた。天正十（一五八二）年より大阪天満宮別当となった。天正十六年四月十四日から十八日にかけての、後陽成天皇の聚楽第への行幸の記録『聚楽行幸記』を記した（『言経卿記』<sup>8</sup>天正十六年四月二十日、二十一日条）。

友益（一句） 速水友益（一五五七年～一六〇七年）。下北面。極官は従四位下。当時は正五位下<sup>9</sup>。本聯句において、友益は一順の最後の一句しか詠じていない。執筆を勤めたのであろう。

本聯句の張行場所は、入韻句（脇句）を詠じた幽齋の居城・田辺城であろう。当時勅勘の身である素然が一座しており、京都で行われたとは考えにくい。幽齋は田辺城に、西笑承兌以下の禅僧、直江兼統と木戸元齋ら武家、紹巴、昌叱ら連歌師を京都から招いたのだろう。

本聯句の詠まれた天正十六年は、幽齋にとって大きな一年で

あった<sup>10</sup>。前年は豊臣秀吉の九州征伐に従い、四月に田辺城を出発、九州の秀吉のもとに趣いた後、七月に帰坂した（九州道の記）。『上井覚兼日記』<sup>11</sup>天正十四年正月二十三日条などによれば、幽齋が豊臣政権と島津方との間に立ち、交渉を行っていたことが分かる。十六年に入り、幽齋は田辺城と京都を往復する生活を送る。八月十六日には島津龍伯（義久）に、十一月二十八日には中院通勝に古今伝授を行っている。幽齋に伝授した三条西実枝が天正七（一五七九）年に死去し、幽齋が返し伝授を果たした公国も天正十五年に死去した。公国の死去以後、幽齋は唯一の古今伝授伝承者であったが、悉皆伝授ではないものの、ともかく門弟に初めて伝授したのがこの年であった<sup>12</sup>。

さらに、本聯句が張行された閏五月八日も特筆すべき日であった。前日の七日、幽齋は九条種通に起請文を提出し、「源氏物語一部之義、称名院殿講談之御抄出并三光院殿御口決等奉受 禅定殿下御説」をみだりに口外しないことを誓っている。それを受けて、本聯句会翌日の九日には、種通は「源氏物語、称名院右禅府之講談之秘説、三光院内府口決在別、不遺一事令相伝畢」という相伝免許状を発行している<sup>13</sup>。閏五月八日はちょうどその中日に当たっており、七日と九日の両日に幽齋と種通とが面談した可能性もあるが、田辺城と京都との距離を思えば、現実的ではなからう。

韻字の問題点のみ指摘しておく。入韻句は「雨の名残の露の涼」で、句末の「涼」字によって下平声七陽韻の韻目をとる。本聯句に幽齋が一座していることから、幽齋編とも言われる『和訓押韻』（北岡本）<sup>(1)</sup>で検すると、韻字のうち、14「堂」、28「汪」、74「腸」、86「償」は立項されていない。但し、それらも、『和訓押韻』を増補した『韻字記』、『漢和三五韻』には掲載されている。

さらに、4の韻字は「商」であるが、「商」は入声十二錫韻である。この当時、「商」は「商」の異体字として認められていたのであろう。それに対して、66「資」は、辞典類では「商」の異体字とされる<sup>(5)</sup>。だが、『和訓押韻』（北岡本）では、「商」と「商」とは別に立項されており、当時は別字の扱いであったことが分かる。

#### 【附記】

引用は本文ままを原則としたが、読みやすさを考慮して、通行の字体に統一し、句読点、濁点を付した。翻刻を許可された公益財団法人永青文庫、細川護国理事長、及び閲覧の便宜をはかれた三宅秀和氏に深謝申し上げます。

(竹島 一希)

#### 【注】

(1) 長谷川強・野口元大「北岡文庫蔵書解説目録——細川幽齋関係文学書——」熊本大学法文学部国文学研究室・一九六一年。本目録は「国書目録叢書 30」(大空社・一九九八年)に再録されている。

(2) 連歌総目録編集会編『連歌総目録』(明治書院・一九九七年)。

(3) 京都大学国文学研究室・中国文学研究室編『後醍醐和漢聯句作品集』(臨川書店・二〇一〇年)。

(4) 連衆については、『国書人名辞典』(岩波書店、井上宗雄)「中世歌壇史の研究 室町後期〔改訂新版〕」(明治書院・一九九一年)、『俳文学大辞典 普及版』(角川学芸出版・二〇〇八年)、『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大事典』(古典ライブラリー・二〇一四年)、楊昆鵬「京都大学平松文庫蔵『和漢々和』翻刻と解題(下)」(『京都大学国文学大叢書』第22号)を、特に禅僧については、玉村竹二「扶桑五山記」(臨川書店・一九八三年)、『五山禅林宗派図』(思文閣出版・一九八五年)、今泉淑夫校訂『鹿苑院公文帳』(続群書類従完成会・一九九六年)、藤岡大拙・秋宗康子校訂『萬年山聯芳録』(思文閣出版・一九九七年)を併せて参照した。

(5) 西笑と有節の鹿苑僧録の記録については、今枝愛眞「禅律方と鹿苑僧録」(『中世禅宗史の研究』(東京大学出版会・一九七〇年)第二章第三節)に拠る。

(6) 東京大学史料編纂所編『上杉家文書之二』(東京大学出版会・二〇〇一年)所収の「後陽成天皇口宣案」を参照。

(7) この当時、漢句方を担当し得る人物(概ね禅僧が担当する)に「清齋」

は見出せず、「清叔」（清叔寿泉）である可能性が高い。「連歌総目録」では、同時期の作品に「清齋」「清叔」の両方が散見されるが、いずれも清叔か。

(8) 東京大学史料編纂所編『言経卿記 三』（岩波書店・一九六二年）に拠る。

(9) 正宗敦夫編『地下家伝 三』（日本古典全集・一九三八年）巻十八に拠る。

(10) 以下の記述は、土田將雄「細川幽斎の文学事蹟 補訂」（『続細川幽斎の研究』笠間書院・一九九四年）第一章、「細川幽斎年譜」（森正人・鈴木元編『細川幽斎——戦塵の中の学芸——』（笠間書院・二〇一〇年））に拠る。

(11) 東京大学史料編纂所編『上井寛兼日記 下』（岩波書店・一九九一年）に拠る。

(12) 小高道子「細川幽斎の古今伝受——智仁親王への相伝をめぐって——」（『国語と国文学』第57巻第8号）に詳しい。

(13) 図書寮編『図書寮典籍解題 続文学篇』（養徳社・一九五〇年）第四古今伝受参照。

(14) 木村晟編『和訓押韻 韻字記 漢和三五韻』（大空社・一九九五年）に拠る。

(15) 児玉幸多編『くずし字用例辞典 普及版』（東京堂出版・二〇一四年）、『難字大鑑』編集委員会編『異体字解説字典』（柏書房・二〇二二年）。

### 【翻刻】

〔凡例〕

一、公益財団法人永青文庫所蔵「漢和聯句（天正十六年閏五月八日）」（一〇八・五・二〇）を底本とした。

一、各句に通し番号を付した。

一、翻刻は原本のままを原則としたが、私に濁点を付した。

一、句、作者を一行書きに改めた。

一、漢字の字体は、原則として現在通行のものに改めた。

一、翻刻は、前半五〇句を赤嶺孝仁、後半五〇句を國部真貴子が担当した。

天正十六年閏五月八日

漢和聯句

1 新竹愛風静

2 雨の名残の露の涼き

3 影落雲間月

4 吟奇天上商商

5 旅人のふみの伝まつ雁のこゑ

6 はるけきほどをおもふ故郷

西咲

玄旨法印

兼続

有節

紹巴法橋

素然

- 7 みし夢も絶もてきての草枕 昌叱
- 8 衣薄覚嚴霜 清叔
- 9 春浅蝶車洪 有和
- 10 かすみもあへぬ野ちの傍 心前
- 11 山はまだきゆるともなく雪降て 寿三
- 12 簾罽翠嵐彰 由己
- 13 軒ちかき松の葉分の夜はの月 友益
- 14 鐘響入秋堂 西咲
- 15 夕霧におこなひ人やかへるらん 兼続
- 16 沙砌履芯忙 有節
- 17 何去失群鷺 紹巴法橋
- 18 時雨きにけるなみの颯 素然
- 19 舟はたゞ山ふところに漕とめて 昌叱
- 20 滝のながれをとむる花の香 清叔
- 21 霞簇埋佳境 有和
- 22 雲過耕富陽 心前
- 23 さびしさや世をのがれての庵ならん 寿三
- 24 むかしの友も夢のあさ床 由己
- 25 別後月添恨 兼続
- 26 きぬたのころもをとづれば亡 有節
- 27 胸霧幾時散 西咲
- 28 眼波雖陸汪 兼続
- 29 地卑逢故少 兼続
- 30 さすらへきつゝ住ゐる方 素然
- 31 仕途辛苦蜀 有和
- 32 参門拝瞻洋 清叔
- 33 こゝろたゞつたへぬこそはつたへなれ 紹巴法橋
- 34 中だちにさへしのお玉章 昌叱
- 35 人妻のつれなきもなをゆかしくて 兼続
- 36 しゐてひかふるきぬは芳 心前
- 37 駒なべて秋の花野をわけくらし 寿三
- 38 近聴処々蟻 有和
- 39 比もやゝさむさそひぬる夜はの霜 素然
- 40 入かたほそき月は弓張 紹巴法橋
- 41 たびぐくに宿直まうしの声たてゝ 昌叱
- 42 群臣仰聖王 西咲
- 43 如天堯広徳 清叔
- 44 おさまるほどもいかに唐 兼続
- 45 たのしみも琴笛の音にあらはれて 心前
- 46 合歛既醉觴 由己
- 47 若違金諾土 兼続
- 48 つくるほとけにおもふ粧 昌叱
- 49 遠寺尋花近 有節
- 50 短堤種柳長 西咲
- 51 春くれば田面に水をせきわけて 紹巴法橋
- 52 里はめぐりのやまのかた岡 心前

53	秋もはや朝のはらの一時雨	玄旨法印	76	馬依馳志良	有節
54	こゑはそこともあらぬさを塵	素然	77	老の身も千里の花を行て見む	紹巴法橋
55	月黒村難認	有和	78	かすみこめたる山を望 <sup>める</sup>	寿三
56	露明園未荒	兼統	79	帯暖進樵歩	西咲
57	野分めく風しづまれば飛こ蝶	昌叱	80	むらのかたへにつゞく草牆	素然
58	むかふ日かげにさむさ忘る	寿三	81	遁喜無温問	清叔
59	開窓童檢卷	西咲	82	宮づかへせんことぞ惶 <sup>る</sup>	紹巴法橋
60	陸座租提綱	有節	83	顧吾三不軾	有和
61	賜紫禪林燕	清叔	84	宿にうつしてふかき篋	昌叱
62	落紅文木鴛	由己	85	春秋のあはれもいかにけさの雪	心前
63	宴遊春欲尽	有和	86	景晴瘦杖償	有節
64	ながき日ながら雲の蔵 <sup>せる</sup>	紹巴法橋	87	五湖詩界窄	由己
65	待侘てながむる空や伊駒山	素然	88	隻日墨雲翔	兼統
66	なに難波めのちぎる賣	玄旨法印	89	にはかなる嵐に雨のきほひ来て	寿三
67	舟はまだ夜ぶかき月にさしわかれ	心前	90	ひいでにけりな小田のわか秧	玄旨法印
68	霧晴漁唱揚	西咲	91	水清涵月色	有節
69	江楓秋気蓄	由己	92	なみのまに／＼なをくづれ梁	心前
70	午枕漏声盪	有和	93	冷しく成つ、音も滝津川	素然
71	明るまでねざます夢や又つがん	紹巴法橋	94	山嶮奈神傷	由己
72	ひとりのゆかばこ、ろ康 <sup>しゃ</sup>	昌叱	95	鞋為探花秣	有和
73	忍びよるかたがへともまだしらで	玄旨法印	96	茶如酌杏嘗	清叔
74	寵衰屢断腸	清叔	97	かくれがはかすむ市ぢの一かたに	昌叱
75	鷗不干恩者	兼統	98	ぬすたつ鳥の跡とむる獮	玄旨法印

豈空風致会

歌のむしろの友ぞ常なる

西咲

紹巴法橋

西咲 八 有和 九

玄旨法印 十 心前 八

為続 八 寿三 六

有節 八 由己 七

紹巴法橋 十 友益 一

素然 八

昌叱 九

清叔 八

(あかみね たかひと)

熊本大学大学院社会文化科学研究科博士前期課程)

(こくぶ まきこ)

熊本大学大学院社会文化科学研究科博士前期課程)

(たけしま かずき) 熊本大学大学院人文社会科学研究部)